

なおすんやが、きっぱりわけがわからん。きんのうまでのおきぬばあはどこへ行ってまつたんやろと、きよときよとしとるとな、そのうち、このむすめがきれいな目をぱっちりひらいて、

「どうもありがとうございます。すっかり歯のいたみはとれました。」
「いやないか。家のもんは、あわてて別の部屋に集まって、

「いったいどういふことや。」

「あの薬のせいや。」

「それにしても、なんときれいなむすめやないか。」

「家でよめに行くまで、たいせつにめんどうみようやないか。」

そんな話をしとるところへ、美しいきものをきたむすめのおきぬさが入ってきて、すずをふるような美しい声でこういったんや。

「七日間、ねっしんにかいほうしてくださいさつてありがとうございます。わたしは、歯をなおしてくださいさつたあなただと、あのおじいさまのご

おんはけっしてわすれません。夕べのゆめの中で、大安寺に行くようにどのおつげがありました。つらいことですが、あなたがたとおわかれしなければなりません。長々、たいへんおせわになりました。」

家のもんは、みんなぼけっとしておったが、そのうち気をとりもどして、

「みんなしてこれからもたいせつにしますで、どうか思いとどまってください。」



といたけど、むすめになったおきぬさは、大安寺へ向って行って
まった。

大安寺にたどりついたおきぬさは、おしょうさんに自分のことを
うちあげた。おしょうさんはあまさんになるようにすすめた。

それから、おきぬさは大安寺で、ほとけさまのみ教えをいっしょ
うけんめいべんきょうしたそうな。

そんなある日、おきぬさは、齒をいためてせてんハとうしとる人
を見かけた。そこで、その人のそばに行き、ぬれた手ぬぐいで、そ
のいたむほおをしずかにひやしてやったんやと。そうすると、ふし
ぎにも齒のいたみはけろりととれてまったんやと。

それから、おきぬさは、齒いたの人んたからひっぱりだこ。け

れど、けっしていやとはいわず、どんな遠いところでも気もちよう出
かけては、齒をなおしてやったんやと。

おきぬさは、やがて、若狭に住むことになった。そして、なんと
八百歳まで、むすめのまんまのすがたで生きたんやと。

そんなおきぬさのことを、みんなは、代々「若狭の八百比丘尼」
とよんであがめたんやと。

大安寺では、おきぬさの死を聞いたとき、おがせの池ばたに石ひ
を立てておきぬさをまつたという。

ところが、それがまた／＼ふしぎ。石ひにおまいりするだけで、
齒のいたみがとれてまうというんやな。これを聞いて、齒のわるい
おまいり客で、池ばたは、いつまでもにぎわったということや。

会津の観音さま

むかし、おがせに大沼とよばれる沼があつて、どんなひどいひでもりにも水がのうなつたことがなかつた。

じゃが、ある年のこと、まあすぐ田植えだというのに、どうしたことか、その大沼の水が、みるみるうちに、底が見えるぐらいまでへつてしまつたんや。

村の年寄りんたあも、

「こんなことは、見たことも、聞いたこともあらへん。」

と、おどろくばかり……。なかには、

「なんかのたたりじゃなからうか。」

と、おそがるものまで、出てくるしまつ。村の若い人んたあも、

「いったい、この先どうなるんじやろうか。」

と、頭をかかえこんでしまつたんや。

そんなある日のことや、沼のほとりの会津の部落に住んどる、甚左という子どもがふしぎなゆめをみたんや。ゆめの中に、泥まるけになつた仏さんが出てきて、

「沼の底の泥をさらえてみるがよい。きつといいことがある。」

といつて、すつとすがたを消してまつたんや。

村の人んたあは、この話をつたえ聞いて、ものはためしじやと、さつそく沼の底の泥をさらえたんや。すると、ふしぎなことに、その日から水がまたどんふえてきたんじや。おかげで村の人んたあは、やつとこさ田植えをすませることができたんじや。



「これは、甚左のゆめの仏さまのおかげじゃ。」
と、手を合わさんばかりに、よろこび合ったんや。

田植えのすんだ農休みの日のこと、甚左は子どもなかまといっしよに、いつものように部落のお神明さまのけいだいで土遊びをしておったんや。すると、この間、沼の底をほりあげた土の中から、泥まるけの仏さまがでてきたんや。

甚左はとつきに、「これは、あ

のゆめの中の仏さまにちがいない。」と思い、だいじに家へ持って帰ったんや。そうして、仏さまをあらいきよめると、うしろがわに字がほられていた。村でいちばんの物知りのお寺さんに調べてもらったら、それは、朝鮮の白頭山や、比叡山にもまつられていたこともある、南無観世音菩薩というありがたい仏さまだとわかつたんじゃ。



村の人んたあは、さつそく部落に小さなほこらをつくり、その仏さまをおまつりしたんじゃ。

やがて、このことが広く知られ、会津の観音さまとして、九月九日のえん日には、近くの村のしゅうもおまいりするようになったんや。

この仏さまは、今でもあの甚左のしそんの家につたえられておりますんじゃ。

後藤 秋夫

しんげいのざんげしづ



ずっとむかしのことやがな。今の伊木山

のことを、このあたりでは、みんな「正月山」といってつたんや。それで、正月がちこうなると、

「正月さん、正月さん、どこまでござった。

伊木の山まで、ござった。

なにもって、ござった。

げたのはのようなもちもって、

ねえぶり、ねえぶり、ござった。」

と、歌ってな、女の子はてんまりなんかついて、遊んだもんや。



「おぜんとおわんを七人分貸してもらえんやろうか、お頼みます。」
と云って、頼んだ男がおったんや。
そうして次の日に行くと、ちゃんと頼んだ七人分の物がそろつたという。それがみんなに知れてな、このあたりの人は、それからはみんなこのりゅうぐうのおかげで、助かることになった。

ある時、山の前の「助さ」の家で法事をやることになった。そこでいつものように、りゅうぐうへ

その正月山の下はなあ、木曾川の水が、うずを巻いて流れこんでおつて、それはそれは、おそがいとこやつたんや。
その淵はまるで大きな池のようにも見えるほどで、「底はりゅうぐうまでとどいとるげな。」と云つてな。それでそこを「りゅうぐう」と云つて、あんまりみんなは、近づかなんだんや。

けど、このりゅうぐうで願いごとをとなえると、ちゃんと聞いてもらえるというので、おそがいとこやけど、そのそばの岩にしみなわをはったりして、大事にしとつたんや。

そうや、むかしはどここの家もびんぼうで、正月やおぼんに、しんせきの人やぎょうさんござると、そんなにおぜんやおわん（食器）があらへん。そこで、みんなはいつも頭をいためとつたんや。そんなある時。このりゅうぐうへ行つて、

行って、「おぜんとおわんを十人分ずつ、お頼みます。」

と、ねがいごとをとなえてつぎの日、十人分のそれはそれははりっぱなぜん、わんをかりたんや。

おかげで「助さ」の家の法事もぶじにすんだんやが、次の日、かりたうつわを返そうと思つて数えてみると、どうしてもおわんがひとつたりん。どこをさがしても、見つからへん。きつとそのおわんの美しさに目がくらんだもんがおつて、こつそり自分の家へ持つて帰り、かくしたんやろうかのう。しょうがないので「助さ」は、ひとつたらんままに、そつとりゆうぐうへ返したんや。

ところが、それからは、だれがどんなに頼みに行つても、もうなんにも貸してもらえなんだそうや。

今では、そのりゆうぐうのあとも、砂でうまつてしまつて、松林になつてしまつておるがのう。

阿部 義弘

金鳥づか

ずんとむかしのことや。村に大きな川が流れておつて、その川をはさんで、村は二つにわかれておつたそうや。

川のみなみつかわは、田んぼもようこえておつて、コメもようけとれ、みんなのくらしもらくやつた。

が、きたつかわは、山が田んぼの近くまでせり出しておつたせいか、土もやせておつて、みんなのくらしは、大そうまずしかったんや。

「川向うのようなくらしができたらのう。」

「コメのめしをはらいっぱい食つてみたいもんやのう。」

「子どもたちだけには、ひもじいおもいをさせとうないで——」。
村のしゅうは、顔をあわせると、こうなげきあつとつたんや。
そうして、どんだけ働いてもくらしがらくにならないので、けんかや、
もめごとも多くなるして、みんなの心は、だんだんとげとげしくな
つていったと。

心があれば、くらしもある。田んぼの草も生えたいほうだい。
こうして村は、どんどんあれていったそうや。

そんなある晩のこと。村でも一番びんぼうな権兵衛が夢をみたん
やと。

白ひげを長くたらしただじつまが、金色の大きな鳥にまたがつてあ
らわれ、いうことに、

「これ権兵衛よ。お前の田んぼも、村じゅうも、すっかりあれてし
まった。これではいかん。そこでひとつ、わしのいうとおりにや

ってみられよ。

よいか、あの裏山のいただきで、正月の日の出の時に、金色のチ
ャボが『トウテンコー』となくことになつとる。

その声を聞けば、きつとよいことがあるのじゃ。が、それは、今
からまい朝、日の出るころには起き出して、汗を流して精を出す
もんでないと聞こえんのじゃ——」。



そこまでいったかと思うと、権兵衛の夢の中の白ひげのじつさまは、スツと消えてしまったそうや。

権兵衛からこの話を聞いた村のしゅうの中には、

「おらあには、もうはよう起きて汗を流すなんてできんでのう。」

「そんなチャボの声を聞いたぐらいで、コメがたんととれるわけでもなからうでのう。」

などといい合つて、やっぱり朝からぶらぶら遊んでいるものもあつたし、

「ようし、わしはそのチャボの声を聞いてやるぞ。」

といつて仕事をしはじめた者もおつたそうや。

こうして、ひとりでも働く者がいると、遊んでいる者には、気味がるい。やがて、権兵衛の話を思い出しては、山の草をかつたり、田んぼをおこしたりする村のしゅうが、三人、五人、十人とだんだ

んふえていったのや。

汗を流して精を出せば、田んぼからは、コメもどんどんとれる。

コメがとれば、みんなの心も明るくなって、笑い声も聞かれるというわけで、いつか金色のチャボの声が聞けることを信じて、村のしゅうはみんな山を開いて畑にしたり、汗を流して働くようになったのや。

やがて、田畑もどんどんふえて、川向うの村にまけんほどのええ村になって、みんなもろくなくらしができるようになった。

それから、だれがいうとなく、その山を金鳥づかと呼ぶようになってな、いつかは金のチャボの声が聞けるかもしれんと、その村では、今でも朝はようからいっしょうけんめいはたらいとりんさる。

鶉沼川のあらそい



むかしむかしのこと。

そのころ鶉沼あたりの木曾川は美濃に向って流れており土地の人たちは鶉沼川とよんでいた。ある年のこと、大雨が降りつづいて川の水かさがまし、あふれた水はうずをまいて、土地の低い尾張の方へ流れこんだ。

「またことしも大水がこつちへ

流れこんできやがった。」

「まい年こんなことでは、こまったもんや。

なんかええ考えはないかのう。」

尾張がわの人は集まってそうだんをくりかえした。

「大雨のたんびに、どろや石がつもつて鶉沼のところで川があそうなつて川はばもせもうなるのや。あそうなつたところをほらんことはなんともならへん。」

「そやけどなあ。あのへんは美濃の国やで、かつてにやったら、ころされてまうぞ。」

「米ひとつとれんのなら、食わずに死ぬこととおんなじや。みんなでやりやおそがいことはあらへん。」

「そうや。そうや。」

そうだんがきまつて尾張がわは、かつてに美濃へやってきて工事

をはじめた。

川の近くに住む与三たちは、いつもの川原の遊び場をとられてぼんやり工事をながめていた。

「ひどいことをしやがる。畑も田んぼもめちやくちやや。工事はしかたないにしても、ほった土や石ころでみんなうまってまうし、ふみあらずし。」

外からかえるたんび、与三のおとうはこわい顔をしてぶつぶつ言った。

鶉沼がわはもうがまんができなかつた。いくら注意しても聞いてくれないので、とうとう役人にうったえた。

役人は七百人の兵をつれて工事場にやっできて、かたっぱしから尾張の人数をやっつけた。兵とひやくしようでは勝てるはずがない。死人やけが人を多くだして尾張がわは、いのちからがらにげていっ

た。いつも美しい川の水が赤く血にそまつた。

それからしばらくは、木曾川をはさんで尾張と美濃のにらみあいがつづいた。やがて代表がでて、みやこの役人のところへ出かけたが、自分かつてを言うばかりで、役人もこまりはててしまった。

さて、みやこへ行った代表たちがいつまでまってもかえってこないで、ごうをにやした美濃がわの役人は何百人というひやくしようをかりあつめ、尾張がわがせつかくほったところをうめてしまい、工事小屋もたたきこわして川へ流してしまった。

尾張がわもだまっていなかつた。人足をかりあつめておしかけ、はげしいあらそいになった。どなりあうものすごい声が、昼も夜も与三の家まで聞えてきた。

「夜までにはかえってくるで心配いらへん。」

こういつて元気にでかけたおとうは、二つめの夜になつてもかえつてこなかった。

「おとうが心配や。どうしとるかみてくる。」

与三は、おかがひつしにとめるのも聞かず川岸の暗い道を走つた。

あかあかともえるたいまつにあらそつている人々のひきつった顔がうつしだされた。

刀をふりまわす。くわでなぐる。

血だらけになつてにげまわる。

与三には、みんなが赤鬼のように



みえた。

「おれのおとうをしりさらんか。」

と、聞いてあるくのだが、

だれも与三などのあいてになつてくれなかった。

「おとうー。おとうー。」

赤鬼のような顔・顔・顔の間を走りまわつたが、どこにもおとうの姿はみられなかった。

さがしつかれた与三は、水ぎわの大きな岩の横にすわつたとき、

ふと見おぼえのあるおとうの着物をみつけた。

おとうは青ざめた顔をゆがめてそこに死んでいた。与三は、おとうにすがりついて泣きさげんだ。

「おとうー。なんで死んだんや……。」

けんかをしたつて、みんな死んだつて、大水はなくならんやな



美濃も尾張もあらそいつかれた
のか、さわぎのやつとしずまった
次の朝、心配しながらまっている
おかあのところへ、与三もとうと
うかえつてこなかった。

中島 忠和



いか。
なんでおとなはなかようできい
へんのや。」
与三の目からは、たきのように
あとからあとからなみだがながれ
た。

やがて、与三は大きく手をひろ
げて、くるったように鬼の顔であ
らそっている人々のむれの中へ走
りこんでいった。

「死ぬのは、おとうひとりであ
るや。
やめてくれー。やめてくれー。」

よめふり坂さか

むかし、むかしのはなしや。

「かかみ野」は、尾張おわの国をずうんと見わたせる高いだん地の上に
広がっておった。「かかみ野」の、東はずれの「はば村」に、おゆう
といつて大へんはたらきもので、親おもいのむすめがすんどつた。
ええお天気の日などは、きまつておとうや、おかあと、のらしご
とにせいだす、おゆうのすがたを、村人たちは見かけたそうな。

ある日の夕ぐれのこと、いままではれとつたのに、急に雨つぶが
おちてきよつた。すると、道のむこうの方が、ざわざわしてきたげ



な。

「なんやろなあ。」

おとうが、かおを上げてみた。な
にやらこつちへやってくる。

「ぎょうさん、ならんできようら
つせるようや。」

「おかしなことやなも。」

「よめごのぎょうれつや。よめご
のぎょうれつや。」

と、小さな声でおとうと、おかあ
がいった。

「おゆう、かおを上げるでねえぞ。」

「なんで。おとう。」

「なあに、キツネのよめりかもしれん。目が合わんようにさ。」
「キツネに見られるとばかされると。」

おかあまでそういう。おゆうは見どうてしようもなかったけれど、しんぼうしてじつとうつむいとつた。よめごのぎょうれつは、おゆう親子に気がつかなんだように、しゃなり、しゃなりと坂の下へ消えていったそう。

そのころ、坂の下の尾張おわりの国から、坂の上の美濃みのの国へ、よめごさがしにきてても、なかなか、はなしがまとまらなただけな。

そのわけはなあ、よめごのぎょうれつが、

「よーめりよー。よーめりよー。」

と、通れるような、道らしい道がありやせん。やれやれ、やつと、坂までたどりついたと思うと、かごやが、

「さかだ。さかだ。」

「なんぎじゃぜ。なんぎじゃぜ。」

「酒手さかてをおくれ。酒手さかてをおくれ。」

と、だちんの出しようがわるいな、前と後でかごをひどくふつたそう。そこはそれ、めでたいよめりじゃ。いやじゃといわずに、だちんをはずまにやらなくて。それがかごやのつけめやつたんやな。それでむすめたちは、くもすけのようなかごやおそろしゅうて、坂の下のはなしには『うん』とは、けつして首をふらなただけな。

「やっぱりなあ。さつきさつきのよめごのぎょうれつ、ありやー、キツネのよめりやつたんや。」

と、おかあがつぶやいた。

おゆうが、キツネのよめりを見てからずうんと長い月日がすぎ、おゆうもぐうんと美しいむすめになった。よめにくれえという、い

いはなしが、あつちからも、こつちからもあつたそうなの。

でもな、おゆうは坂の下にすむ、心がきれいでようはたらくわか者と前からすき合せておつた。おとうも、おかあもあれならよいしよたいを持つやろと、ふたりを「めおと」にしてくれた。しあわせな日が長く続いたんじや。

ある年のこと、いつもの年よりか雨が多くて、毎日さんざか、ざんざかふりおつた。そうやから坂の下の木曾川の水はどんどんふえて川原はみんなかくれちまい、ずうつとむこうまでどろ海のようになつてしまった。

そんなとき、おゆうに年とつたおかあの病が重いとのでしらせがあつての、おゆうが川ぶちにきてみると、木曾川は、川はばいっばいのにごり水がうずをまいて、ごうごうとうなつて流れとつたんじや。

「はよう、水、ひいておくれ。おかあに、おかあにいたい。おかあしなれるなえ。」

おゆうは、手を合わせておがんだと。でもな、ふきあれた雨がうそ





のようにしずまったときには、もうおかあはしんでまっていたそう
な。

そのころのな、いちばんの親ふこうというのは親のしに目にあえ
んということじゃったげな。あれだけおとうや、おかあを大事にし
たおゆうでさえ、親のしに目にあえなんだ。おゆうは坂をうらんで
ないたげな。川を悲しいと思っただげな。それから、いよいよ、坂み
ちをはさんだよめりのはなしはきらわれたそうな。

そんなことがあってから、その坂のことをだれいうのう “よめ
ふり坂” とよぶようになったと。

国定 仁子



おししま

おししまというのは、蘇原の
祭りにかかせない大事な、わたり
ものなんじゃ。

ほーら、めでたい時におかぐら
まいや、ししまいをすることがあ
るじゃろ。ああいうたぐいのもの
でな。

頭がししのかっこうしちよって、
からだか紺色の布で作られてござ



話は、村中にひろがってな。見に来た人びとは、

「ありや、キツネがばけとるんじや。」

「木のかたまりじや。」

「いや、目が光つちよる。生きちよるようじや、大きな口が何やら言うちよるようじや。」

「そんなことあるもんか。」

「はしごをかけて、おろしてみよか。」

「ばちでもあたらたら、てえへんだ。」

「そうじや、そうじや。」

「じゃー、ちよつくら、話してみるかえ。お前さん、何ものだえ。キツネか

る。五メートルぐらいの大きなおかたなんじや。祭りの日にはな、そのおししさまが、加佐美八幡宮の神さまと、ごいつしよに、ご渡上されるというわけじや。まったく、よそには見られない、めずらしいものじや。その、おししさまの由来を、じいさまは、わしに話いてくれた。わしが、まだ子どものころの事じやが……。

この野口町が、野口村といつちよつたむかしのこと。それ、お前たちが、カブト虫をとりに行く、あの「安積の森」の家の、ずーっと先代の人の時のことじや。なんでも、この各務野の南にあつた一本松にな、ある時、何やらみょうなものが枝に乗つちよつたんじや。人が、うずくまつちよるんでもない。よく見るとな、ししの頭をしちよる怪物じやつた。

タヌキのばけものかえ、いつのまに、どこから、だれとござらつし
やったえ。」

「何もへんじがねえから、やっぱし、ただの木じゃ。かざり物にで
もするがええ。おろそう、おろそう。」

と、口ぐちに言いあつた。

そして、村人が、そのみょうなものを、おろそうとした時、

「手をふれるな！」

われは、おりぬ。」

大きな声が、木の上から聞こえた。びっくりした村人は、大あわ
てでにげ帰つたそうじゃ。

話は、村から村へ広まつて、川の向こうの村からも、山のあつち
の村からも、もの知りの老人や、えらい人たちがやって来て、何

とかおりてもらおうと声をかけたが、

「そちには、ついていかぬ。」

「そなたにも、ついておりぬ。」

と、どうしても、おりられなんだんじゃ。

そんな、ある日、野口村をおさめておられた安積さまが、

「わたしが行ってみよう。」

と、おとももの者をつれて行かした。

そして、木の下で、

「聞きますところ、そなたさまは、今までのだれの言う事も、お聞
きなされなんだそうな。どなたの化身かぞんじませんが、わたく
しで、できますことなら、なんなりとお申しつけください。」

といって、おじぎをさっしやつた。その頭の上へ、

「われは、そなたの来るのを待っていたのじゃ、われをつれて、野の

口の里へもどられよ。」

安積さまは、そのおししを大事なお客さまとして、家へおつれし、
ていねいにもてなしたんじや。

それから、おししは、ゆつくりとしたちようしで言われたんじや。

われは、そなたの先祖にゆかりのある者、また、村社、

神明さまにも、ご縁のあるものなり。なお、加佐美八幡宮

にまつられし方は、その昔、この地を治められし方。今は、

神とまつられて、この地のい

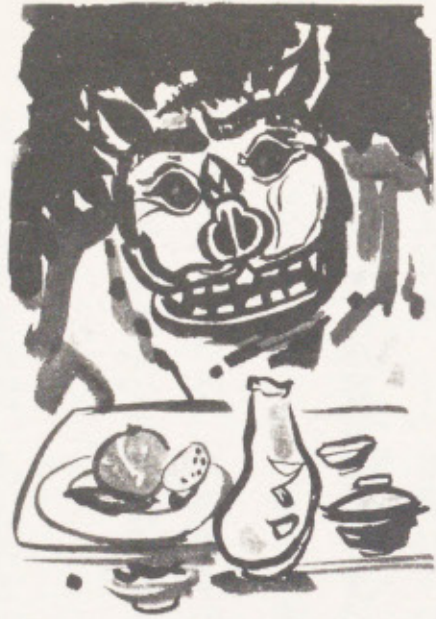
や栄を守りたもうなり。わ

れその昔、この方にお仕えせ

し者。このたび、ねがいかな

つて、この地にまいりし者、

この上は、八幡宮をお守りし、



お使者となりて、この地のた
めに役立ちたく、はるばるま
いったもの。
一時もはよう、八幡宮へつ
れてまいりたい——
とな。

そんなことがあつてから、

ふしぎにも、村はだん／＼とゆたかになったという。

やがて野口の人たちは、「おししさま」とよぶようになった。

毎年十月十五日の祭りの日は、夜明け前に、おししさまをお

迎えに行き、神明さままでていねいにおもてなしをする。午後

には、みこしのお前立ちをつとめて、ご渡上されるならわしと

なっている。

渡上のお世話をするのは、ずっと、この野口の人々にかぎられており、そのお役目には、案内役一名、おししをつつていく役三名、警護の役四名、弓もち一名、太鼓役二名、しし箱つり二名。

そのうちの八名は、「上下はかま」に白たび、わらぞうりばきの姿で、お供をする。

少し前までは、役をきめるのに「玉くじ」をひいておられたという。

おししをつつて行く役の人は、三日前（昔は七日前）から、食事に気をつけ、お初物ばかりをいただき、よごれた物には一さいさわらないで、身も心も浄めて、その日の行事が無事終わるように、大事にして、その日を待たれるという、ていねいなしきたりが、ずっと続いているのである。

山田 袈津子

持田のキツネばなし

むすめさんに会った



そやのう。これは、わしのまんだわかいときのことやった。ぼうんたのおとうよりも、まっと、わかいころのことや。

その日、用があつてな、岐阜まで行ったんやが、長びいてまつてな、帰りがおそくなってまつた。伊吹の、お宮さんとこまできたときによ、もう、まっくらやった。

雨のあとで、なんとなく、むしあつーい晩やった。かさをすぼめてな、かたにかついで、草まるけの細い道を、テッコ、テッコ、歩

いとつたんや。

そんなじぶんのことやで、今のゴルフ場なんて、もちろんあらへん。あのへんは、雑木（雑木）のふかい山やった。持田へ帰るその道も、うーんと細い道でな、りょうがわの山は、どえらい木がはえとつたで、夜になりや、そりゃきもちわるくてな、よつぽどの用のある人ほか、通ろうとは、せなんだんや。

そんな、こころぼそい道やったが、わしや、それ、まんだ元氣のええ、わかもんやったで、

「なに、くそつ。」

と思つて、歩いとつた。

飛鳥（飛鳥）んどこをすぎて、もうじつき、持田へのまがり道んどこやなと思つたころ、フツと見ると、二間（二間）ばか（四メートルほど）先に、きれいなむすめさんが立つちよる。ほして、しゃら、しゃら、どこ

つちへ歩いてきよるんや。

まっくらやみで、自分の手もとも、はつきりせんくらい暗いのに、ふしぎと、そのむすめさんのすがただけは、はつきり見えるんや。きものの、がらまでな。ピンクちゆうんかな、うすい赤色の地に、小さい梅の花のもようが、うつくしゆう、ちりばめたったわ。それがまた、こまかい、おしべのようすまで、わかつたんや。



びっくりしたわなあ。きみわるかったわ。

ほんでも、わしゃまけたあかんと思つて、なにげないふりして、
どんどん歩いてつたつた。ほして、知らん顔してな、そのむすめさ
んとすれちがつたんや。そしといてな、ちょこつと行つてから、フ
イツと、ふり返つて見たらな、なんと、そのむすめさんも、ヒョイ
ツと、ふり返つて見ちよる。

わしゃ、そんなとき、ハツと気がついた。こりゃあ、キツネや。キ
ツネは、ばけて出ても、人とすれちがうと、二三歩行つて、ちゃん
と、ふり返つて見るちゆうことを聞いちよつた。「よし」と、わし
や思つた。ほして、いきなり、かついどつたかさを、むすめさんに
むかつてな、ビューツと、ふりまわしたつたんや。

バサツと、音がしたわ。とたんに、ほれつきり、むすめさんのす
がたは、きえてしまつたわ。

火をとられるぞ

そうやのう。これは、わしが子どもんときの、話や。

ある日、ねえさんと二人で、お使いにいかんならんことに、なつた
んや。

もう外は、暗うなつてきとつたわ。それでの、ちようちんを持つ
て、家を出たんや。なんやしらん、うすきみわるーい、いやな晩や
つた。

ヒョイツと、遠くを見るとな。ありゃあ、坂井の、山神さんのう
らてあたりやつたなあ、ポーツ、ポーツ、とな、あかりが並んで見
えるんや。ちようちん行列、みたいにな。

「ありゃー、なんじゃ。きれーなもんやなあ。」

ちゆうて、わしや、ねえさの後から、ついて行きよったんじゃ。

ほしたらな、ねえさが、急に、スツと止まったわ。ほして、ちよ
うちんの上から、ふたするように、手、かぶせてな、

「はよ、何でもええで、ぼう、ひろってりや。」

ちゆうんや。わしや、何のことやら、さっぱりわからせん。

「ねえさ、何やつとる。そんなどこへ手かぶせて、やけどするげ。」
ちゆうて、あきれて、見とつたわ。ほしたら、

「キツネ。キツネがおるわ。こうせな、いたずらして、火、きやい
てまうでやわ。」

わしや、びっくりしたわなあ。

それで、ねえさの言うとおりに、ちゃつと、かれ枝をひろってきた
んやわ。

「よし。その枝、思いつきり、ふりまわしんさい。音がするくら

いにな。キツネは、その音が、
きらいなんやで。」

ねえさに言われてな、わしや、カ
いっばい、ふりまわしたったんや。
ヒューツ、ヒューツと、音がする
ようにな。

カサツ、と、どこやしらんで、

音がしたわ。ほしたら、ねえさが、

「あ、にげてつたわ。」

ちゆうて、また歩き出した。

やれ、やれ、思ってな、わしも
後からついてつた。ヒューツ、ヒ
ューツ、て、枝をふりながらの。



いつの間にか、山神さんとこの、あかりの行列も、消えてまっ
つたわ。

子どもがさらわれた

そうやのう。わしがまんだ、小さい子どもんときのことやったな
あ。

この持田の子がな、一人、おらんよんなってまったんや。わしよ
り、三つばか年は上やったが、元気のええ、男の子やった。
ひるま、遊びに出てったんやがの、夜になっても、帰ってこうへ
ん。

そりや、もう、大きわぎになっつまったわ。

「おキツネさんに、さらわれたんや。」

ちゆうんでのう。みんなして、さがすことになった。わしの、おと
うも出て行った。そうや、ぼうの、ひいおじいさんやわな。どこの
家からも、元気のええ男しゆうは、みーんな、集まったわ。

ほれでな、アブラゲを、わらにとおしてな、こう、くびいかけて、
「おキツネさーん。子ども返してくれー。」

「アブラゲ、あげますでのー、返してくださいされー。」

ちゆうてな、大きな声でよばりながら、山の上や、竹やぶの中や、
そこら中、さがしてまわったんやわ。

それでも、なーかなか見つからへん。

「どこぞ、遠くへ、つれてかれてまったんやろか。」
てって、みーんなん、がっかりしかけた。

そんなふうにして、三日目じゃったかなあ。



大きないもあなの中でな、その子が、ちよこーんと、すわつとるのが見つかった。飛鳥あすかの南の方の竹やぶの中でな。

やーれ、やれ、助かったわ。ちゆうてな、みんなよろこんだ。ほして、

「おい、ぼう。どうしちよつた。

三日もおらんようになって、はらへつたやろう。なーんにも、たべとらへんのやろう。」

ちゆうてな、しんぱいして聞いたんや。

「いーんや。はらんだ、へつとらんへよ。うどんもたべたし、まんじゅうも、たーんとたべたで。」

ちゆうて、ケロツ、としちよるんやと。

「なんやて。そんな、まんじゅうやうどんみたい、どこにあったんや。」
て、きいたらな、

「あるがな、そこに。ほれ、うどんも、まんじゅうも。」

ちゆうて、指さしたと、

「どこにー。」

ちゆうて、みんな、その子の指さすところを見て、

「ありやー。」

てつて、びつくりしてまったそうな。

そこにはな、ミミズや、まぐそが、木の葉の上に、ようけつくねてあつたんやと。



弁慶と立岩

むかしむかしのことなんや。

美濃の各務原は広い野原と広い山におおわれておつてな、その中ほどに、赤ぼし山という山があったんや。

ある日、伊勢に行く旅人が、昼近くにその赤ぼし山についてな、その山のふもとにあずまやを見つけた。

丸たんぼうを組んだ台に腰をおろすとな、女の人であらわれて、

「だんなさん、お茶はどうですか。」

といてな、あまそうなぼたもちを二つ旅人に出したそうな。

旅人は礼をいってそれをぱくり口に入れたら、たちまち、どろになつてまって、さらのまんじゅうもどろになつてまತ್ತる。おかしいことに、家から持ってきたべんとうは見あたらん。

旅人は、いちもくさんに、この村の六兵衛さんの家へかけこんでそのことを話したんや。

二、三日たってから、六兵衛さんは旅人のいったあずまやを見ようと思ひ立ち、旅人のいったとおりに歩いていくと、なるほど、小さなあずまやが見えてきた。

「ごめんください。」

六兵衛さんがそういういいながら、丸たんぼうの台に、腰をすえると、おくで男がもちをこぬるのが見えたのや。その男のおかみさんらしい女がお茶をもつてきてな、

「だんなさん、ぼたもちはいかがです。」

つてな。

「いや、それより草もち、おくん
なさい。」

「は、はい」

しばらくすると、草もちがきた。青々したよもぎは、かおりがたか



て、口の中に入れると、とけてまいそうな草もちやった。

六兵衛さんはそれをつかんでみたが、やっぱ、おいしそや。

そこで、口に入れるとどうや。

「こ、こりや、ペペっペペっ……。」

やわらかい草もちは、口の中に入れてたたん、わらになってまった。六兵衛さんが家で作ってまったにぎりめしは、いつのまにかすがたをけしとる。

ふと前を見ると、二、三間（四〜五メートル）先を、キツネがニひき、あつという間に、しげみの中にすがたをけした。

このことがあってから、この村の子どもんたは、こんなうたをうたうようになったんや。

「赤ぼし山のおこんこは、べんとうぬすんでどろまんじゅう。

赤ぼし山のおこんこは、おにぎりぬすんでわらまんじゅう。

おこんこ、おこんこ、こーんこん。」

ある日、六兵衛さんが田んぼでいねかりをしとると、

「わしは、奥州に行きたいがどう行けばよいか。」

と、大声をはりあげてたずねる男の声がするんや。六兵衛さんがおどろいて見上げると、せも横も六兵衛さんの二ばいもある大男やつた。



「せつしやは天下のごう力弁慶じゃ、義経さまのみえる奥州へのがれるのじゃ。ところで、奥州へは、どう行けばよいのじゃ。」

この大男がこういったで、六兵衛さんはきつねを退治してもらおうと思つてな、

「奥州へ行く道、教えますに。だが、こつちもちよつとたのみがありませんに。」

とすかさずいった。

二人はあずまやの前を通りこし、赤ぼし山の頂上にのぼりつめたんや。

「あそこに、お寺の屋根が見えとるが、そこまで行きんさつたら、こんどは、道が二つに分かれていますに。左の方の道をどんどん行きなされると、鎌倉の方に行く大かい道に出なさるに。」

六兵衛さんがそう教えたたんには、

「おぬし、鎌倉かまくらに行くのか。」

と、とつぜんあらあらしい声でしたんや。二人がおどろいてふりむくと、よろいかぶとに身を包つつんださむらいが、弓ゆづを大きく引いて、弁慶べんけいめがけて矢やを放とうとしとる。

「こ、こんな山おくにさむらいがおるとは、どういふことじゃ。」
弁慶べんけいはふしぎでならん。そのさむらいは、弁慶べんけいよりもちだん体が大きくて、目はらんらんとひかつとる。弁慶べんけいは旅べんすがたで、弓矢ゆづをもつておらん。

六兵衛ろくべゑさんは、マツの木きのうしろにかくれて、ただ／＼ふるえながら、二人ふたりのようすを見守つとる。弁慶べんけいはどうするのかつてな。

すると、弁慶べんけいは、自分のそばそばに生えとるススキを一本ぬきとつた。そして、そのすすきを両手りょうてでおがむようにもつてな、ゆつくり、目をとじたんや。それから、小さな声で、



「わしのごうカがはつきできますように。」

といつたんや。

「えいっ。」

弁慶べんけいは目をしずかにあけ、そのススキをふりあげ、このさむらいめがけて、カいっばいぶつたいたんや。

すると、かみなりかと思わせるよ
うな、ガラガラツとすすまじい音
がしてな、さむらいのうしろの大
岩いわから、小石こいしがちりはじめた。そ
してみるみるうちに、まん中にわ



づんげん山のふたつ岩

しょうやさまは、くたくたにつかれておった。

昼も夜もぶつとおしで、氏神うぢがみさまに雨ごいの、おいのりをはじめから、もう、なん日たったことじゃろう。

ドドン、ドン、ドン
とひびく、たいこの音も、村人のおいのりのことばも、ただ、高い

れ目ができ、それが大きくくぼんで、地ひびきをたてながら、二つの岩にわかれた。さむらいがススキをよけたで、うしろの岩にあたつたんやな。

「ススキのほで岩をわるとは、なんと強い人間さま。」

さむらいはそういつたかと思うと、ぱつとすがたをけしたんや。

「おや、今のさむらいは。」

弁慶べんけいが目をこらしてあたりを見まわすと、三間げん(やく五・五メートル)ぐらい先を、こそそとキツネがにげとるんや。

「あつはつはつは。このわしにはまいつたな。」

弁慶べんけいはそういつて六兵衛ろくべゑさんにわかれをつけると、鎌倉かまくらの方へ向かった。

このことがあつてから、赤ぼし山のキツネは、村人や旅人に向けていたずらせんようになったんや。

空に、すいこまれていくばかり……

「おお、神さま。もしも、おなさけがありますなら、どうか、わたしのねがいを、ききとどけてください。わたしら、けっして、よく深いねがいを申しとるんじゃないのです。

見てくだされ、このたんぼを。」

そうおいのりする、しょうやさまのまわりには、元気をなくした村人たちも集まって、ひそつと立つとつた。どの顔も、どの顔も、くらしくしずんどつた。

いねは、からからにひびわれた土に、たつとるのがやつとのようなありさま。ほを出す元気もなく、葉先はもう、黄色くかれかけてまつとる。

村人の一人が、田んぼの土を手にとつて、ギューツとにぎつてみた。パラパラとくだけで、砂のように、指の間からこぼれてしま

う。村人たちは、口々に言った。

「こんなひどい日では、何年ぶりじゃろう。このまんまでは、こどしの米は全めつじゃ。」

「そうじゃ。村のもんは、みんなうえ死にじゃあ。」

「大きな川も、池も、近くにはないのやし、天の水だけがたよりなんやがなあ。」

「のう、しょうやさま。まんた、わたしのいのりかたが、たらんやろうか。」

よわよわしく、首をふりながら聞いておつた、しょうやさまが、つと、首をとめて、

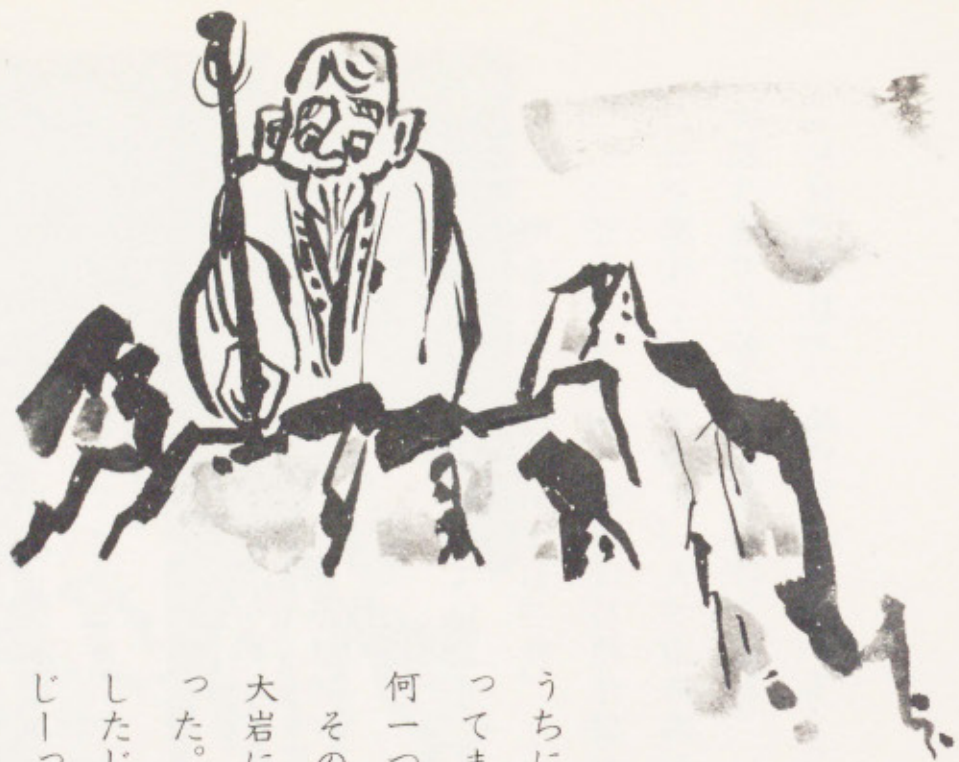
「そうじゃ。まんた、わたしのいのりかたが、たらんのもしれん。もつと、いのらなあかんのや。うじがみさまだけでなく、天に近い所でも……。」

そう言つて、さつそく家へとんで帰らした。そして、身をきよめると、新しいきものにきがえ、おどもを一人つれて、ごんげん山へと向かわつせた。

日のくれた山道は、なかなかけわしい。しーんとしずまりかえつたほそい道で、二人がふむ、かれ枝のおれる音ばかりが、大きくひびいた。

ようようちようじょうの、お宮さんの近くまできたとき、そこに、大きな岩が一つあつた。しろうやさまは、その岩のそばにひざまずき、心をこめて、いっしんにおいのりをはじめた。

「おねがいでございます。神さま。雨をふらせてください。村人はこまりきつておりますじゃ。わしのからだは、神さまにささげます。どうか、雨をふらせて、村人をたすけてやってください。」
こうして、なんども、なんども、同じことばをくりかえしている



うちに、どうとう、まよなかになつてまつた。あたりはまつくらで、何一つ見えやへん。

そのとき、しろうやさまの前の大岩に、スーッと、白いかげが立つた。まつ白なかみを、長くたらしたじいさまやった。じいさまは、じーつと、しろうやさまを見おろしながら、

「ほんとうに、お前のからだを、ささげるのか。」

と、ゆっくりとゆわつせた。ひくいがよくひびく声やった。

「ハ ハイ。村人をたすけてさえ、くださるなら……。」

しうやさまは、やつこのことで、そう答えた。

「それほどまでに、雨がほしいのか。それならば、ふらせてやろう。」
そう言ったかと思うと、じいさまのすがたは、フーツと、どこかへ
きえてつてまった。

やがて、夜あけが近なつていたんやろう。東の方の空が、しらじ
らと、明るくなりはじめておつた。

と、どうじゃろう。明けはじめた空が、また、急にくらくなつ
たかと思うと、ザーツと、大つぶの雨がふり出した。そりやもう、
ひどい雨で、ヒヨウまでまじつとる。

「おお。雨じゃ。雨じゃ。」

りよう手を上げ、大声でくるつたようにさけぶ、しうやさまにも、
雨はえんりもなく、ふりかかった。

そのとき、ピカツと、しうやさまにむかつて、一すじ光が走つ
た。おとものは、しうやさまから少しはなれた所で、思わず



頭をかかえこんだ。

そして、おそろおそろ顔を上げたときには、しょうやさまのすがたは、どこにも見あたらんのだ。びっくりしたおとものものは、「しょうやさまあー」。

声をかぎり、よんだ。いくらよんでも、へんじはない。

ふしぎなことに、そばの大岩は、いつのまにか、大きく二つにわかれて、それでも、しずかにすわっておったそう。

持田町のごんげん山の、ちよう上近くに、今も、その岩はしずかに村を見おろしています。

「二ツ岩」とよんで、村をすくつてくれたしょうやさまのことを、語りつたえています。

宇野 孝子

東門奴とうもんぬ

むかし、むかしのことや。

ある日、一人のわかもんが、さかい川の土橋の上にたちどまつて、大きなためいきをついとった。ふどころへ風を入れながら、外山とやまの方へむけたその顔は、つらそうに、口びるをギョツとかみしめておった。

わかもんは、しょうやさまのお使いで、東門のぶらくへ、ことしの上納金じょうのうきん（ぜい金のようなもの）を、集めに行くところじゃった。

「そりやなあ。東門のしゅうんたは、ほかのひやくしょうしゅうと

はちがつて、かわらやいとるんやで、ぜにはもうけちよる。じゃがのう。」

そうブツブツ、ひとりごとを言つて、重い足どりで歩きはじめた。

たしかに、東門のしゅうは、ひやくしょうだけやのうて、むかしからかわらもやいてきた。須衛瓦すゑがわといわれて、ひょうばんもええし、遠い京の都や、尾張おわりからも、注文があるのやつた。けど、かわらを使うのは、お寺か、金持ちの家の人ばかりや。

どんなにいいいに作り上げても、手まひまかけてやつとやき上げ、えらい目して遠い所まで運んで行つても、そんなくろうなど、とてもわかつてはくれやせん。いくらたのんでも、向こうの言いなりの、少ねえぜにしかもらうことはできなんだのじゃ。そんなかわらやきたちを、わかもんはいつも気のどくに思つとつた。

じゃから、いくら主人の言いつけとはいつても、この上納金集め



は、いやな、つらいしごとやった。

ほんでも、一けん一けんまわって集めた金は、ずいぶんようけになつた。

「こんな大金、おといたらえらいこつちや。一生はたらいたどて、わしには返せやへん。」

と、大事に、ふところ深くしまいこんだ。

田んぼ道を通りぬけて、土橋のへんまできたときには、もう、ホタルがとびはじめとつた。

「こらあかん。おそなつてまつた。はよ帰らなしかられるわ。」と、走るように土橋をわたり、急いで帰って行つた。

しょうやへ帰りついたときは、もう、すっかり暗なつてまつとつた。やれやれと思つたとたん、わかもんは、思わずドキツとして、ふところへ手をやつた。

「あ、ない。ない。えらいこつちや。集めた金がない。おといたんやろか。」

まつ青になつて、気がくるつたみたいにあふところをさがしとつた。

その目の前へ、しょうやさまがヌーツと立たした。

「なんじゃと。集めた上納金がないやと。たわけめ、それですむと思つとるのか。」

わかもんは、もう、どうしたらいいのかわからん。からだはひとりで、ガタガタとふるえ、声も出ん。おそろしい顔でにらみつける、しょうやさまの前で、ただ、小さくなつて、土間に頭を、すりつけるばかりやつた。

ちようどこの日、上納金をうけとり、お役人が来ておつた。話を聞いて、ざしきから出てきたお役人は、

「なにっ。上納金を落したと申すか、このふとどきものめ。おおか

た大金に目がくらみ、お前がぬすみ、どこぞにかくしでもしたの
であらう。けしからぬやつじゃ。」

と、いきなり刀をぬくと、ふるえているわかものに、サツと切りつ
け、あつさりころしてまった。

この日からじゃ。あの土橋のあたりを、赤い火の玉が、あつちへ
フワフワ、こつちへフワフワ、おといた金を、さがしまわるよう
になった、というんじゃ。だれぞが近ずくと、スーッと消え、人が遠
のくと、また見えだすんじゃと。

村の人んたあは、その土橋のことを、「火の玉橋」と言うようにな
ったそうな。

ついこの間まで、子どもたちが、さかい川へホタルをとり
行こうとすると、

「どうもんやつこが出るで、一人で行くでないぞ。」

「ぜにもつてくでないぞ。どうもんやつこにとられるで。」

と、きまつて言われたものよ。

今では、東門へ行くその道も、まっすぐになり、土橋もいつか、
りっぱなコンクリートの橋になってまつて、東門奴とうもんやこの火の玉も、
見かけんようになったがの。

宇野 孝子



あとがき

各務原に伝わる話を各務原のみなさんにぜひ読んでもらいたいと思いつてより三年近い月日が流れました。その間何度も研究会を開き楽しい本になるよう努力を重ねてきました。

各務原の昔の方言がわからなくて困ったこともありましたが、さし絵の先生はわざわざ現地まででかけてかき方を工夫なさいました。

そんな多くの苦勞を重ねてできあがったものだけに私たちの喜びはひとしおです。

どうか一度、この本を持ってお家の人とお話の現地をたずねてみてください。お話がいつそうおもしろくなると思います。

ここに紹介したお話は、各務原にたくさん伝わっている昔話のうちほんの一部だけです。後はこの本を読まれたみなさんが集めてみてください。近くのおじいさん、おばあさんを訪ねて聞いてみるのもいいでしょう。テ

ープレコーダーがあったら録音しながらお話を集めるのもいいでしょう。お話がまとまったらさし絵も工夫してかいてみてください。きっと楽しいお話の本ができると思います。各務原のたくさんの昔話がみなさんの手でまとまることを期待しています。

昭和五十三年発行の日に

各務原市小学校国語同好会

河田迪也

御協力いただいた方々

長塚町	浅野 義一 (手力雄神社宮司)
持田町	小川 真一
那加町	河村 弘道 (少林寺住職)
羽場町	薫田 薫
下中屋町	小島 秀学 (河野西入坊住職)
東島町	五島 峻良 (宝蔵寺住職)
東島町	白木 勝代
野口町	寺田 重市
前渡町	富樫 心行
坂井町	永田 得一
各務原町	益田 五郎

(敬称略、五十音順)

各務原市小学校国語同好会々員

阿部 義弘	杉山 郁男
宇野 孝子	中島 忠和
加藤 和夫	中村 勝行
勝野 淑代	西村 敏行
河田 迪也	長谷川 恭子
国定 仁子	山田 袈津子
後藤 秋夫	
坂井多美子	
坂井田 勲	

(五十音順)

かかみがはらのむかし話

発行日 昭和五十三年七月十日

編集 各務原市小学校国語同好会

発行カヨウ出版

羽島市江吉良五一七番地
電話(〇五八三)九二一五六一一〇

印刷 浅野印刷株式会社

代表者 浅野五治

製本 山田産業株式会社

落丁・乱丁はお取替之します

かがみかはらの
むかしの話



北
4
+

なが

そはら

かがみかはら

うしろ

木曾川

うしろ

うしろ

各務原市図書館
220001846

